

楽漢的「小説」考

意味の変容と教材的意義に迫って

狭山ヶ丘高等学校 樋口敦士

一 はじめに

二〇一六年のノーベル文学賞には歌手ボブ・ディラン氏が選ばれた。「風に吹かれて」や「ライク・ア・ローリング・ストーン」に代表される数々の名曲を世に送り出した功績は高く評価され、ロックの殿堂に名を連ねている事実があるにもかかわらず、受賞の際に歌詞が文学賞にふさわしいのかといった議論が交わされたことは記憶に新しい。これは、それだけ「文学」という言葉には散文小説の響きが強いことを物語っている。現実には定型詩たる韻文の方が文字通り人口に膾炙された点で影響力を持っていると思われるが、一方で「小説」も娯楽の対象として親しまれてきた歴史がある。本稿は「小説」という語の意味の変容に迫りながら、その教材的意義を改めて考察するものである。

二 現代「小説」観―「物語」との違い―

「事実は小説よりも奇なり」、しばしば娯楽の一つに数えられる「小説」ではあるが、類語に「物語」がある。「物語」と「小説」の相違点については各方面から様々な定義がなされている

が、両者の違いについて現代の高校生はどのよう認識しているのだろうか。二〇一七年度に本校高等学校二年生の生徒（男女）一六名を対象に「物語」と「小説」についての意識調査を実施した。以下はその集計結果である。

(1) 「物語」や「小説」を読むのは好きか？
好き98（84%） 嫌い18（16%）

(2) 文学作品を読む効果はどこにあるのか？

・新しい表現方法や語彙が豊富になる

・作者の世界を追体験することができる

(3) 「物語」と「小説」との違いはどこにあると思うか？（複数回答可・数字は延べ数）

【物語】 創作されたもの 26

古典的 現代的 20

空想的 現実的 17

粗雑な内容 洗練された構成 11

子ども向け 一般向け 10

(4) 「物語」、「小説」と聞いて連想する作品をそれぞれ記せ。（複数回答可・数字は延べ数）

【物語】『源氏物語』35 『竹取物語』33

【伊勢物語】13 『平家物語』10

【桃太郎】10 『ハリー・ポッター』5

【小説】『羅生門』19 『変身』11 『ころも』7

『坊っちゃん』6 『山月記』5

調査(1)、(2)からは、大半の生徒が「物語（小説）」を楽しみ、その文章表現を味わっていることがわかる。調査(3)、(4)からは、「物語」と「小説」の違いについて「物語」を「口頭で語り継がれてきたもの」（あるいは「空想的」・「子供向け」・「古典的」）として、「小説」を「作者によって意図的に創作されたもの」（あるいは「現実的」・「一般向け」・「近代的」）として捉える者がいることがわかる（一方で、上記の数字には現れていないが、「わからない」、「（両者に）さほど違いはない」と回答する者も少数見られた）。それでは、「物語」と「小説」の一般的な定義はどのようになっているのだろうか。『広辞苑』第七版（二〇一八年一月）には次のような記載がある。

【物語】

② 作者の見聞または想像を基礎とし、人物・

事件について叙述した散文の文学作品。日本文学では平安時代から室町時代までのものをいう。大別して伝奇物語・写実物語または歌物語・歴史物語・説話物語・軍記物語・擬古物語などの種類があり、「日記」と称するものの中にはこれと区別しにくいものもある。ものがたりぶみ。

【小説】

②(坪内逍遙による novel の訳語)文学の一形式。古代における伝説・叙事詩、中世における物語などの系譜を受け継ぎ、近代、とりわけ一八世紀以降の西欧で発達、詩に代わって文学の中心を占めるに至る。韻文の形式や手法から解放され、どのような素材でも自由に扱うようになった。四迷、小説総論「されば摸写は小説の真面目なること明白なり」ここでは「物語」を中古・中世の散文作品と捉えるのに対し、「小説」を西洋から伝わった近代の散文形式作品と定義つけている。ただし、両者のイメージの違いは必ずしもこの考えに縛られているものばかりではない。ここで各方面の研究者の見解をいくつか取りあげたい。

国文学者笹淵友一氏は一般的な概念とことわったうえで、古典的な内容のものを「物語」、近代的な作品を「小説」とする考えを提示しつつ、両者の連続性を指摘している(「物語と小説―平安朝から近代まで」)。また、アラビア文学者岡真理氏は「物語」を小さな共同体の中で語られ

たもの、「小説」は地域や共同体を越えて異質な読者によって読まれるものと見ている(『思考のフロンティア記憶／物語』)。さらに、文学者田中実氏は「物語(記憶)」に「語り手の自己表出(詩)」が加わったものが「小説」であると解釈している(『読みの背理』を解く三つの鍵)『国文学解釈と鑑賞』七三・七)。

各氏がそれぞれの解釈によってこの両者を区分している現状が窺える。現代において「物語」と「小説」なる用語に対する解釈は必ずしも一様に方向付けられたものではなく、常に新しい定義づけが試みられる実態が垣間見える。

近代文学における「小説」の名称が一般的に定着したのは、逍遙の『小説神髓』(明治十八(一八八五)年)によるところが大きい。この文芸評論は人間の心情によって小説は描くべきことを説きながら、功利主義や勸善懲惡的な文芸を退けた。従来戯作者の地位は低く、卑しめられていたが、逍遙の「小説は美術なり」の一言によって高められたことは想像に難くない。翌十九年に発刊された末広鉄腸の政治小説『雪中梅』序文には尾崎行雄の次のような小説観が見える。

邦人未だ小説の何者たるを知らず。動もすれば、之を視て、婦女子消間の玩具にして、士君子の手にだも触るべき所に非ずと為す。焉ぞ知らん、小説(今綏当の訳語を得ざる

が故暫く小説(の)字を以て novel に充つ。

以下単に小説と記する者は是なり、と知るべし)は近世文学上の一大発明にして其文化を賛育せること、実に少小ならざるを。古の歴史は荒誕怪奇にして、編者の想像に成れる者多しと雖ども、尚ほ是れ歴史にして、小説に非ず。支那の古に飛燕外伝、穆天子伝等あれども、復た一部の小説と称すべき者なきに非ずや。

この記述からは、「小説」の語が近代に至って便宜的に用いられていた事情が読み取れる。それでは近代以前における「小説」の語について考察を進めたい。

三 江戸時代における「小説」観

「物語」と「小説」の語への意識が我が国の文学観の中で最も話題にのぼったのは江戸時代のことであった。江戸中期の儒医に都賀庭鐘という人物がいる。彼は「読本」の嚆矢に当たる『英草紙』(寛延二(一七四九)年)という作品を世に出したことで文学史に大きな足跡を残した。この庭鐘について評判記には、「小説家の学者ぞふな」、「あれこれ小説集が板にござります」(『三都学士評林』明和五(一七六八)年)と紹介するが、中村幸彦氏はこの「小説家」とは「白話(小説)の研究者」と指摘している(『中村幸彦著述集』十一卷)。つまり、「小説家」とは中国白話小説の翻訳や翻案する人物のことを指しており、現代の「作家」ではない。

明代以降、中国から『水滸伝』、『三国志演

義』、『西遊記』などの白話小説が陸続と我が国に伝えられた。荻生徂徠の古文辞学派による白話受容と相俟って、唐話学習が盛んになり、江戸中期以降に大流行した。これに伴って、白話小説の趣向を借りながら日本風に書き改められた翻案文学作品が文人の間に広がった。こうした作品は「読本」というジャンルに区分されるが、『水滸伝』を翻案した滝沢馬琴の大作『南総里見八犬伝』もその一つである。

白話短編小説集『三言二拍』を抜粋して施訓した岡白駒の『小説精言』（寛保三（一七四三）年）の序文には、東方朔の『神異経』、干宝の『搜神記』、張華の『博物志』、任昉の『述異記』などに加えて『漢武内伝』、『飛燕外伝』を指して「古の小説」と称し、さらに『虬髯客伝』、『紅線伝』、『聶隱娘伝』、『補江総白猿伝』といった作品もこれに類すると述べている。数々の中国古典奇譚を列挙しながらこれらを総称して「小説」と呼んでいた事情が窺える。先の都賀庭鐘も第二作『繁野話』（明和三（一七六六）年）序文において「近路行者三十年前国字小説数十種を戯作して茶話に代ゆ」と述べているほか、平賀源内『風来六部集』収録の『天狗鬮鑑定縁起』（安永五（一七七六）年）には、門人戯蝶による「我が風来先生、戯に筆を採、多くの小説世に行れてより」という序文がある。ここでは「小説」に「よみほん」というルビが施されており、「読本」と「小説」が不

可分な関係として捉えられていたことがわかる。藤原佐世撰の『日本国見在書目録』によれば、六朝志怪小説『搜神記』や唐代伝奇小説『遊仙窟』は平安時代までに既に我が国に伝わっていたことがわかる。一方、江戸時代には白話小説が積極的に受容されて翻訳、翻案を通して広く愛読された。もともと中国の散文文学を意味した「小説」が我が国の散文文学を指す用語としても使われるようになった。

これに対して「物語」といえば、日本の古典文学を指すときに限られている。本居宣長も「中むかしのほど、物語といひて、一くさのみあり。物がたりとは、今の世にはなしといふことにて、すなはち昔ばなし也」（『源氏物語玉の小櫛』）と述べている。それは「歌物語」、「軍記物語」、「歴史物語」などといった文学ジャンルを表す場合もあれば、『源氏物語』、『伊勢物語』といった個々の書名にも現れている。江戸中期の国学者賀茂真淵は『国意考』（明和二（一七六五）年頃）において漢語の煩雑さを批判し、和文の重要性を主張した。真淵の弟子筋に当たたる建部綾足や上田秋成によって中国の白話小説の趣向を借りた『西山物語』や『雨月物語』が世に問われたが、これはいわば「小説（漢文）」の「物語（和文）」化であった。飯倉洋一氏は、真淵門下によって中古・中世の系譜に連なる「物語」の創作がなされたのは自然の流れであったと述べている（『秋成考』）。

以上の点から考察すると、「物語」を日本古来の散文文学作品、「小説」を中国由来の散文文学作品として整理することができる。庭鐘の弟子でもあった秋成も『ますらを物語』の中で「もうこしの演義小説、この物語文、其作れる人のさかし愚にて、世にとどまる」と使い分けている。このように「小説」は第一義的に中国文学を指していたのだが、近代に入ると坪内逍遙等によって読み換えられて新しい意味が付与されたことになる。「小説」が「日本語」的な側面を持つていることは注意したい。

四 漢文小説を用いた翻案創作の指導

前節では漢文小説が翻案を経て日本文学の重要な要素となった経緯を確認した。この観点に照らせば、授業内において生徒に漢文小説の翻案創作を体験させることが作品受容における理解の深化につながるものと予想される。特に唐代伝奇小説『離魂記』は、相愛の王宙との仲を妨げられた張倩娘の魂が肉体から遊離して思いを遂げる話として有名であり、こうした発想は和泉式部の和歌「物思へば沢の蛭も我が身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」（『後拾遺和歌集』巻二十）など様々な文学作品に散見される。ここでは遊離魂をテーマにした原稿用紙八百字程度の翻案創作指導について実践報告する。二時間にわたる『離魂記』の講義解説後、四〜五名のグループに配置する。ここで印象に残った表現や創作可能な場面設定について話し合

わせる。討議後に翻案作業に入る。その後グループ内での自己の創作の下発表及び全体発表の代表者の選出を経て、代表者による全体発表へと移る流れとなる。以下に生徒作品を掲げる。

・「重い本」
(高校二年生女子)

とある本がある。読むと魂が抜けるという本。今回、私はその本のありかを探し出した。寂れた廃墟の一室に埃をかぶっていた本は妙に不気味で、ひどく興味をひかれた。恐怖にも勝る好奇心のままに手を伸ばす。想像よりもはるかに重い本。その重さに少しの疑問を抱いたが、すぐに興味が上回り、家に持ち帰った。その場ですぐに読みたかったが、何年も掃除されていない汚れた部屋では集中できそうにない。家に着く手前で本の埃を払う。先程まで気づかなかったが、とても鮮やかな赤色の表紙だった。風呂に入り、柄にもなく少し手の込んだ料理を作った。私はそれほどまでに浮かれていた。赤色の重い表紙をめくる。冷たく乾いた音が続いた。何も起きないではないか。やるせない気持ちでも晴れさせようと、冷たいものを取りに行く。ふと姿見に視線を移した。私の姿がない。手に視線を向ける。ちゃんとある。ちゃんと動く。姿見に視線を戻す。そこに私の姿はない。頭がおかしくなったのか思考が回らない。慌て、転ぶ。積んであった本が崩れ落ちて、私の頭を…通り抜けた。何が起きたのか全くわから

ない。回らない頭で何とかまわりを見回す。

今までそこにいた場所に私がいた。這いずりながら近寄る。静かに呼吸をしている。触れることはできなかった。それから丸二日、眠っている私は起きなかった。あの本は…。唯一、こんな非現実的な現象を引き起こすとしたらあれしかない。だが、部屋のどこを捜しても見つからない。私はかすかな希望を胸にしてあの廃墟に向かった。二日前に訪ねた寂れた廃墟の薄汚れた一室に埃を被っている本。――ああ、そういうことか。――

私は本に手を伸ばした。埃とともに本に群がる無数の手に、重さを感じながら。

ここでは典拠の恋愛話がホラー仕立てに改変されている。多くは現代に取材したものが、中には『離魂記』の続編や『走れメロス』に趣向を借りた作品もあった。彼らは思い思いに独自の遊離魂譚創作を楽しむ一方、原話『離魂記』にまで理解を深めようとする様子も見られた。

五 まとめとして

芥川龍之介の『杜子春』や中島敦の『山月記』は今なお幅広い読者から愛読されている。近代の名作誕生の背景には、漢文小説が翻案を通じて日本に受容された伝統があり、この点にも注意を払って指導する必要がある。

江戸後期、斎藤拙堂は我が国の漢文学史を俯瞰し、『枕草子』や『源氏物語』が、『李義山雑纂』、『漢武内伝』、『飛燕外伝』、『長恨歌伝』、

『霍小玉伝』の影響を受けていると指摘した

(『拙堂文話』巻一)。近年では物語の祖『竹取物語』もまた白居易の漢詩に触発されたとする説まで提示された(静永健『漢籍伝来 白楽天の詩歌と日本』)。日常的に我々が愛読する「小説」の語の淵源を辿っていくならば、漢文学との関わりを見落とすことはできないはずである。

生徒からはしばしば、「小説」を読むこと自体は好きだが、必ずしも国語の力には繋がっていないという声も寄せられる。彼らにとって「小説」とはあまりに身近で学習の対象としての存在であることを忘れてしまいがちであるようだ。川端康成は「小説ほど日常生活に近い芸術はないであろう。われわれの一般の経験がいつも小説と相寄り合って作品の中に存在しているのだ」と述べている(『小説の研究』)。各人が様々に定義する「小説」の語に改めて着目することで、生徒は現代まで脈々と受け継がれている伝統文化を実感することだろう。『莊子』外物篇に見える「小説」はもともと俗文学を指したものだが、魯迅が「小説も詩と同じように唐代になって一変する」(『中国小説史略』第八篇)と評したように唐代以降に芸術性が高まった。我が国では翻案を通じて作品中に漢文小説の要素を積極的に受容してきた。こうした観点から俯瞰することで、漢文小説は高校生にとって身近で有益な教材になるものと結論づけられる。